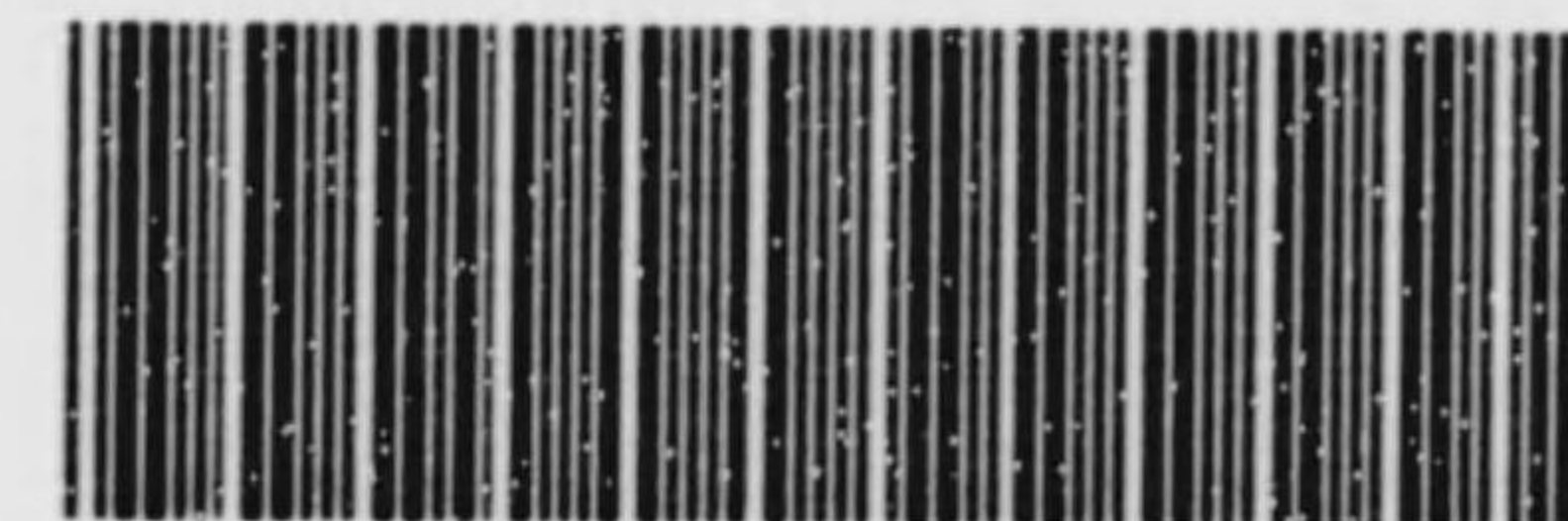


393.2
N34
3

翼賛壯年叢書
第三九輯
戦史からみた戦局観
中井良太郎著

393.2
N34
3

3



0056670000

0056670-000

393.2-N34-3ウ

戦史からみた戦局観

中井良太郎・著

大日本翼賛壯年団本部

昭和19

AJD

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法第67条の規定に基づき、平成12年5月1日付けで文化庁長官の裁定を受け使用するもの

翼賛壯年叢書



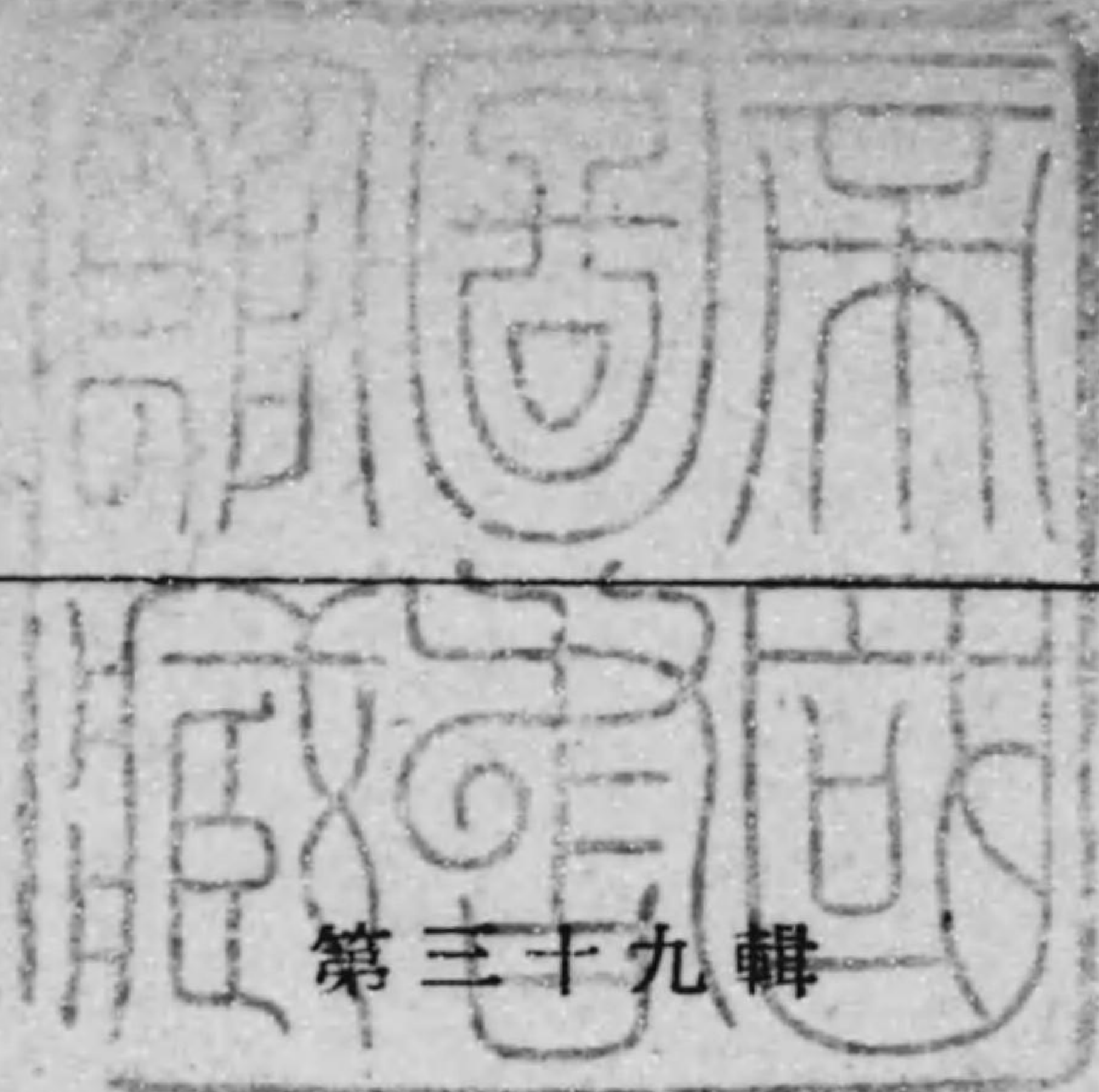
39

戦史から見た
戦局観

中井良太郎

大日本翼賛壯年團發行

393.2
N34
3



第三十九輯

戦史からみた戦局観

中井良太郎

大日本翼賛青年團本部發行



發行所寄贈本

愈々全局的な決戦を豫期すべき昭和十九年を迎へ一億國民の決死報國の決意も益々堅くなつた。思ふに印緬國界方面においても、決戦が初まると考へねばならぬ。ビスマーク群島においてもニューギニヤにおいてもその戦鬪は益々激化するであらうし、又、敵は内南洋方面へも來攻するだらうし或はわが北邊を窺ふことは勿論、わが本土空襲も必至たることは今更申す迄もあるまい。愈々本年こそは全局的な決戦の年であるといふ理由はここにある。さて、かく考察すると戦局は波瀾重疊はらんじゅうさうといふ情況を呈することも豫期せねばならぬ。かかる戦局に處して一喜一憂してゐては遂に敵に致されてしまふであらう。本冊子は、かやうな戦況に處しても聊かも戦意に動搖なきやう國民を指導するための一資料として執筆したのであるが、紙數に制限があるため、眞に梗概中の梗概で兵學辭典の断片的なものに過ぎぬ。或は寧ろ索引的といつた方が妥當な所もあらう。併し本冊子が二千六百四年の紀元の月に發行せらるるとの事を聞いたので建國聖戰史觀に特に力を用ひ、又大東亞戦局をみる日本戦史については外國のそれに比し比較的多くの頁數を費やした。讀者各位はこれを諒とせられ、本冊子を手引として更に當該戦史を研究し益々必勝の信念を鞏固ならしむるの資に供せらるれば、著者の本懐これに過ぐるものはない。

皇紀二千六百四年新春

中井良太郎 自識

目次

總説

第一 建國の聖戰に仰ぐ長期建設戰の聖範	六
第二 日本戦史よりみたる大東亞戦局概観	一五
一 日露戰爭と大東亞戰爭との比較概観	一六
二 我が古戦史が與ふる示唆若干	二〇
第三 歐洲戦史よりみたる獨逸の戦局概観	三五
一 露國進入戦史と獨軍の作戰	三五
二 前大戰にみる獨軍の作戰振り	三七
三 七年戰爭よりみたる今次の大戦	三六
四 第一次世界大戰と今次大戰との比較概観	三九
第四 戦史に現はれたる米英戰略の特質概観	三〇





執筆者紹介

出身地 三重縣

略歴 大正五年陸大卒業後陸軍省軍務局及び同人事務局に課員課長として奉ずること前後十六年、この間獨逸及び南洋に出張その後聯隊長、旅團長、東部防衛司令部參謀長、師團長を経て昭和十五年初夏現役を退く。支那事變には、某兵團長として中支及び南支に轉戦す。
現在、厚生省委員、その他多數の公私の職を奉ず。翼贊會關係は本部の常任講師、三重縣支部顧問。

主要著書 (1) 日本古戦史の眞偽、(2) 戦争史觀の斷片、(3) 戰略的に觀た織豊戦史、(4) 長期戦の國史考、(5) 將帥論、(6) 我が戰國時代に於ける名將の謀略、(7) 史考大東亞戦争(8) 心の維新、(9) 兵理より觀たる産業戦の指導原理(以上既刊) (10) 思想決戦(11) 史談の味覺(以上最近發賣) (12) 新らしい吾等の世界觀(近刊)

總説

凡そ戦局をみてその判断に誤なきを期するためには(1) 戦史(2) 戦理(3) 現況といふ三つの角度からみねばならぬ。又戦局には大局觀と局部觀とがあるから更にこの點にも思ひを及ぼし、局部の戦局に目が眩んで大局觀を誤るやうなことがあつてはならぬ。所で、戦理といふものは主として戦史から編み出されたものである。故に戦史は戦理の淵源であるといつてよろしい。よつて本冊子では戦史觀に立脚した戦局のみ方を説いてみようと思ふのであるが、必要に応じて戦理の一端に及ぶこともあるであらう。

筆者は今日迄、いはゆる世の識者と申す人達の戦局觀を聴くと甚だ腑におちないものがある。國民に向つて一喜一憂するなと呼びかけながら自からは一喜一憂してゐることを告白してゐるやうな言説を吐いてゐる。事實國民が一喜一憂するのはかかる識者の言説がその因をなすと評して大なる誤りではないと思ふ。識者にしてかかる錯誤に陥るゆゑんは色々あらうとは思ふが、戦史の研究が足らずして戦史觀から戦局をみる眼がない。或は戦争學又は作戦學即ち戰略、戦術の學理などを學ばない、いはば定石を知らずして圍碁をみてゐると同様であるから、正しいみ方が出来ない。或はただ現在の戦況を知るに汲々としてそれ許りみてゐるから、遂に局部觀に眩惑されてしまふのだらうと考へる。世の識者を以て自から任じ、戦争下國民指導に任ずる人は、せひ共戦史や戦理の常識を備へるやう自修して頂きたい。

戦史には大局の戦史と局部的の戦史とがあるが局部的の戦史研究は専門兵家には必要だが、一般指導者に必要なのは大局觀の戦史特に戦争史の眞髓を知ることである。併し筆者は本冊子でかかる眞髓を紹介す

ることは容易でないが、初めまへがきした如く波瀾重疊の戦況に處しても戦意に動搖なからしむといふことを目標として以下筆を進めよう。

第一 建國の聖戦に仰ぐ長期建設戦の聖範

滿洲事變より支那事變へ、支那事變より大東亞戦争への過程を史觀すれば我々は一大長期戦を交へ來り然も今後更に長期戦を覺悟せねばならぬ情勢にあることは今更申す迄もない。又この長期戦争は米英及びその一味たる張學良や蔣の政權或は關國などが皇國に加へた脅威迫害に對し、皇國が自存自衛のため、これ等一切の障礙を破碎して大東亞共榮圈の建設を完成することを目的としてゐることも亦ここに事新らしく説くまでもない。故にこの長期戦争は古來の外國史上にある長期戦争とは比較にならぬ崇高なる目的を有してゐる長期建設戦である。外國史上にも長期建設戦争は多々ある。例へば古くは歴山大王のマケドニヤ帝國の建設、中世では成吉思汗の蒙古帝國の建設或は近世の拿破侖一世の中西歐における帝國の建設、敵英帝國の建設も皆長期戦争を伴うた建設であり、又百年戦争とか三十年戦争或は北歐戦争(約二十年)の如き抗争本位の長期戦争もあるが、その何れをみてもたゞ侵略を目的とするにすぎない。その建設した帝國もそれは覇者の自然を満足せしむる對象物たるにすぎないのである。然るに皇國の行ひつつある長期建設戦は皇國の自存自衛を全うすると共に萬邦をして各々その所をえしめ、兆民をして悉くその堵に安んぜしめ、萬邦共榮の樂を偕にし給はんとする世界史上未だ他にその比をみない廣大無邊崇高極まりない大御理想の顯現を目的とするものである。外國史上に類例なき長期建設戦たるゆゑんがここに在る。

併しこの廣大無邊崇高極まりない大御理想の本源を温めれば申す迄もなく「六合ヲ兼テ都ヲ開キ八紘ヲ掩ウテ宇ト爲サムコト亦可カラザランヤ」との 皇宗の建國大詔即ち萬民周知の六合開都、八紘爲宇の大御理想がその本源である。このことは長くも三國同盟締結の際御漢發の 詔書を拜すれば恐察することが出来ると思ふ。

かく考察して更に建國聖戦史を纏くと實に長期建設戦指導原理の眞髓は長くも 皇宗の遺し給へる聖範に盡きると申すべきである。本冊子は恰も皇紀二千六百四年の紀元節の月たる二月に發刊するといふ好機でもあるので、尙更に感を深くかつ強くする次第である。

讀者は或は建國聖戦といへばわが國史としては形容し難い貴さを有するが、單に戰史といふ觀點に立てば時代は古く規模は小さい、これを以て凡ゆる科學の精粹を盡した幾百萬の大軍で幾千里の外に幾百里の大戦線において戦ふ現代戦をみることは見當が違ふといふかも知れない。併しそれは考へざるの甚だしきもので、かかる考へ方が間違つてゐる。戦争指導の眞理、戰略戰術の眞髓といふものは時代によつて變遷するものではなく、戦争哲理の眞髓は古今一貫變りはないのである。建國聖戦が現代戦局觀に合せぬといふが如きは國寶たる美術の粹を知らずして、がらくた物とみなすに等しいと評せねばならぬ。

たとへ形の上でも時代と比例し、今日迄の世界史と比較して考へてみねばならぬ。今より二千六百餘年前といへば西紀前六百六、七十年以前のことである。西洋史に有名なハンニバルの羅馬遠征開始は西紀前二百十八年であるから、わが建國聖戦はそれよりも尙四百四、五十年も古いことである。今日宮崎縣と奈良縣との關係から申せば隣近所であるが、二千六百年前のことを思へば舟艇による海上交通も決して容易ではなく、紀伊大和の國境山岳地帯などの突破も今日からみてもなみ大抵のことではない。戦地は未知未開

の蠻界であること今日のジャングル地帯の作戦のやうであつたことは想像するに難くない。兵家は由來山岳地帯の突破といふとハンニバルやナポレオンのアルプス越えをその雄なるもの如く考へてゐるが、山中で戦闘はしてゐない。山岳戦についてはこの建國聖戦を初め今日まで日本民族ほど體驗の深い民族はあ
るまい。こんな些末點までも西洋史中心の戦史觀が存在する。西洋史中心の世界史觀を轉換して皇國史中心の興亞史觀に立つ世界史學の確立が興亞文化の重大なる要件である際、過去における西洋戦史中心の兵學も亦皇戰史を中心とする興亞兵學へ轉換せしめねばならぬ。この意味においても亦建國聖戰史から長期建設戰指導原理の眞髓を求めることが絶對的の要務であると信ずる。

さて建國聖戰は古事記によれば十六年、日本書紀によれば六年といふ年數となるが、その何れにしても長期建設戰たるにおいて變りはない。長期建設戰の指導原理の眞髓を求むるには十六年でも六年でも敢へて問ふ所ではない。

まづ建國聖戰の目的は何れにあつたらうか、それは 神勅を奉じ給う御鴻圖で前講抄奉掲の六合開都八紘爲宇の大御理想御開顯にあつたことは敢へて説明するまでもあるまい。八紘爲宇の大御理想は萬邦をして各々その所をえしめ兆民をして悉くその堵に安んぜしめ萬邦萬民共榮の樂みを偕にするよりに爲し給はんとの 聖旨に存するもので世界大家族主義とでも申すことが出来る。米英的なる侵略主義帝國主義などは微塵だも介在してゐないのである。このことはわが對外國策史が最も雄辯に物語つてゐる。

わが二千六百餘年の歴史を温ぬれば、六合開都の大御理想は完全に達成せられ、八紘爲宇の大御理想開顯へと進みつつある。上古や中世のことは暫らく不問に附すが、明治維新は六合開都の大御理想の近世的御開顯であつた。或は北海道方面の開拓を考へて國土完成といふ觀點に立つと或は明治の御代を以て六合

開都の大御理想の完全なる顯現とも考へられる。そして明治の御代は亦八紘爲宇の大御理想開顯のための近代的發足であつたと考察が出来る。明治維新は王政復古であると共に又、六合開都、八紘爲宇の國家觀世界觀の復古であつたといふ史觀も存するのである。

明治の御代となり我國は八紘爲宇の大御理想開顯へと近代的な巨歩を進め出し爾來今日に及んでゐるがこの間、皇國の生存を脅威し六合開都八紘爲宇の大御理想の開顯を妨害せんとする種々の勢力に際會し、その度毎に破邪の劍を抜かざるべからざる狀況となり、これが屢次の戰爭となつた譯であるが、日清日露の兩役から支那事變までは八紘爲宇の大御理想開顯の爲の近代的發足途上における緒戰であり、大東亞戰爭は八紘爲宇大御理想開顯のための前進途上の本戰たるの史觀が存するのである。

更に建國の聖戰以來二千六百餘年の國史上に遺る内外戰をみれば一つとして六合開都、八紘爲宇の大御理想の開顯たらざるはなしといふ史觀の浮ばないものはない。そしてこの大御理想は又、六合開都の民族的國家觀、八紘爲宇の民族的世界觀となつた譯である。

要するに二千六百年を通ずる皇戰の目的は建國聖戰において創始確立せられて今日まで一貫してゐるのである。大東亞戰爭の目的は炳乎として宣戰の大詔に宣はせられてあるが「列國トノ交誼ヲ篤クシ萬邦共榮ノ樂ヲ倍ニスルハ之亦帝國カ常ニ國交ノ要義ト爲ス所ナリ」との 聖旨と三國同盟締結の際御渙發の詔書とを伺ひかつ今日の國策をみれば大東亞戰爭の目的中にも八紘爲宇の大御理想はこれをはつきりとうかがひ奉ることが出来ると思ふのである。

次に建國の聖戰について特筆大書せねばならぬことは建軍の本義を確立し給ひ皇戰の實行は總力戰でなければならぬといふ原理を創始し給うたことである。

天皇御親率の下、國民皆兵といふことはわが建國の基本體制であり同時に又建軍の根本義であることは今更説明するまでもないが、その創始は建國聖戰においてであり、その確立も亦建國聖戰にあつたといふことも一見明瞭なる史實である。

長くも明治十五年一月四日軍人に賜はりたる勅語に「昔神武天皇躬つから大伴物部の兵とも率ひ中國のまつろはぬものともを討ち平け給ひ」と仰せ給はつたが、大伴物部の兵は國民皆兵たる日本民族の中核たる軍隊であつたと講解する。この皇軍の編成は又男軍と女軍とあつたことは日本書紀により考察しうる所であるから、女軍も決してわが建軍の本義には反するものではあるまい。史家は、神武天皇の御東征といふが、事實は大伴物部の氏族よりなる軍隊を國民皆兵の中核とし給ひ、天降民族擧つての東遷であつたと考證してゐる史家の説は筆者も尤もだと思ふのである。従つて建國聖戰は正に天降民族の總力戰である。總力戰は實に建國聖戰に始源を有してゐる。建國の聖戰後わが内外戰は多々あるが、對外戰は多くは總力戰であり總力戰と目すべきものは皆成功し然らざる場合はその成果は香しくない。三韓征伐、元寇撃碎戰などは上古及び中世における總力戰であり、日清戰爭、日露戰爭は近世における總力戰であり、何れも大成功に終はつてゐる。これに反し權臣跋扈時代の對外戰は多くは總力戰でなく成功もしてゐない。

總力戰といふことは第一次歐洲戰爭後ルーデンドルフ將軍がいひ出したやうに説く人が多いが、總力戰の本質は既に古くよりあり、古來一貫してゐる。ル將軍がかく名稱を附したといふことと、總力戰の科學的研究が近時生れたといふに過ぎない。ここにも我等はもつと自主的な史觀に立つて事を成さねばならぬの感深くするものである。

現大戰はいふまでもなく總力戰である。滿洲事變勃發以來、我國は次第に總力戰體制へ移行し、今やこ

の體制も完成した。問題はこの體制による總力の最高度發揮のための指導であると思ふ。この指導如何は戰果を左右するのである。

次に建國聖戰史に輝く皇軍の本領及び皇戰の特質として仰ぐ所は、皇戰はただ單に武力のみを以て敵を壓倒するのではなく威徳並行以て敵を服するのであるといふ聖籙を貽し給へる點である。皇宗が降將を御重用遊ばされ、降族をよく宣撫し給うたことは書紀を讀む者の等しく感佩する所と思ふ。戰陣訓が

常に大御心を奉じ、正にして武、武にして仁、克く世界の大和を現するものは神武の精神なり。武は嚴なるべく仁は溫きを要す。苟くも皇軍に抗する敵あらば烈々たる武威を顯ひ斷乎之を擊碎すべし。假令峻嚴の威克く敵を屈服せしむるとも服するは撃たず從ふは慈しむの徳に缺くるあらば未だ以て全しとは言ひ難し。武は驕らず仁は飾らず自ら溢るるを以て尊しとなす。皇軍の本領は恩威並び行はれ、遍く御稜威を仰がしむるに在り。

と訓へた本源は建國聖戰史であることを銘肝すべきである。

以下その他の長期建設指導原理の眞髓につき遺し給へる聖籙を紹介しよう。

その一は、天皇は民族に輝かしき希望を與へ給うて御統帥されました點である。

御東遷の大御言を拜すると、天皇御親から輝やかしい御希望を有し給うと共にこれを、皇兄皇子方に傳へ給らせ給うてゐることは日本書紀をみれば伺ひ奉るに十分である。この大御言は必ずや百官有司衆庶にも詔りましたといふことも推想し奉ることが出来る。

御東征の大御言を謹按するに、皇宗の御東征は天孫に授け給はつた大八洲國の中州に蟠居して皇化に服せざる豪族を討平げ給ひ、神勅に昭に宣ふ所を顯現し給はんとする聖戰であり、初めから長期建設を豫期

し給うたと拜察することが出来る。これが爲、前途の希望を宣示し給うたと講考するとき、後世我々の特に感銘を深くせねばならぬ所である。

凡そ戦争には希望絶望などといふことを超越し人事を盡して天命を待つ的な努力を以て戦はねばならぬ場合もあるが、長期建設戦となるとその原因動機如何に拘らず國民に前途の光明と希望とを與ふるの指導を必要とする。このことは現戦争においても痛感する所であるが、畏くも二千六百餘年の昔においてこの聖範を貽し給うたことを拜するとき畏き極みである。

抑々長期戦となるとこの間戦局の變遷あり幾多の難事に遭遇することは當然である。この難事を克服すべき旺盛なる決意は熱誠なる忠君愛國心と前途の希望から生ずるものである。長期戦下において國民の緊張を持続せしむるには色々用意を用ひねばならぬ。徒らに刺戟的言動を濫發して國民を感傷的ならしむることも又、樂觀的なことばかり並べ立てて民心を油断せしむることも將又、非常識なことをやつて國民を嫌がらすといふやうなことも共に適切なる指導ではない。必ずや前途に輝やかしい希望を示し、その施策を以て一步一步この希望に近づくことを現示することが緊要である。雄渾適切千古に遺る名言を以て指導することは必要だが、空漠たる大言壯語や、悲壯なる美辭麗句の連發だけでは長期戦の指導は出来なといふ點につき注意を要するものがある。

その二は作戦と建設とを並行せしめ給うた聖範である。

皇宗が日向を御出發遊ばされてから御途中筑紫の岡田宮、安藝の埃宮及び吉備の高島宮に御駐蹕あらせられたことは書紀に明瞭である。これは政治的には該地方の御建設であり戦略的には作戦基地の御設定とその逐次の躍進的御方策であつたと伺ふことが出来る。

かつ戦ひかつ建設するといふことは長期建設戦に必須の指導方策であり、戦力を養ひつつ一步一步と堅實にその作戦と政治の地歩を建設しつつ戦争目的を達成するといふことは長期かつ遠征的建設戦の鐵則である。皇宗は二千六百餘年以前においてこの鐵則を創始しましたのである。實に偉大そのものと恐れながら申上げ奉る次第である。

古來の遠征史の失敗の多くは建設なき盲目的な深入りがその原因であるが、建國聖戦の聖範の如く遠征するならば遠征の害は減少し消失するに至るものである。現戦争においてもこの點は深く考へねばならぬ譯であるが戦争指導當局もこの點に充分に意を用ひられ蒼々と實現しつつあることは力強く感ずる所である。

その三は艱難の克服と必勝信念の堅持並に、戦勝に驕らざることについての聖範である。

建國聖戦史をみれば、皇宗の御統帥の御非凡、御高邁、御卓越の記録に満ちてゐるが、専門的な兵學戦理に屬することは差控へ一般何人も銘肝せねばならぬ點は、艱難の克服と必勝信念の堅持並に、戦勝に驕らざることについての聖範である。その史實の細部は紙數の制限上省略するが、皇宗が八十梟帥を撃ち給うた戦記に關する書紀の記述中に『天皇志存必克』とみえてをり又、愈々長髓彦の誅滅の所にも『先是皇軍攻必取戰必勝』と記されてゐる點から伺ひ奉つても、皇宗の必勝の御信念は極めて御堅固であつたと恐察する。史上孔舎衛の坂の御難戦（或る説には草香沼畔の御上陸の水際戦闘であると考察してゐる）より南紀への海上の御機動、それよりあの峻峻なる南紀と紀和國界山地の御突破戦などは實に御艱難の頂點とも拜察申上げるが聊かも御捷はませ給うことなく必勝の御信念益々御固く、聖戦を御完遂遊ばされたことは、今日の國民の一時も忘れてはならぬ聖範である。

八十梟帥を御誅後、皇宗は『戦勝而無驕者良將之行也』と仰せ給はり、戦勝に驕らぬよう聖諭ましましてゐる。この聖慮は今日の大戦下、國民の常に銘肝せねばならぬ所である。

その四は 皇宗は絶えず士氣の昂揚につき 聖慮を垂れ給はつた點である。

皇宗は御征戰間御戦勝のときでも難戦のときでも常に廣大無邊の聖徳、御豊富なる御神藻を以て終始士氣を御鼓舞遊ばされ將兵の必勝信念を益々堅固ならしめ給うたことは、あの『撃ちてしまむ』の御製を初め書紀をみれば所在にその聖徳を伺ひ奉ることが出来る。

その五としては如何なる長期戦でもその結末は短期に決するといふ史實の始源は建國聖戰史にあるといふ點である。

建國聖戰は記の十六年説、紀の六年説、その何れが正しきやは別として最後の三、四ヶ月で決したことは一致する所である。皇軍が孔舎衛坂の御難戦及びそれ以前の長年月の進軍、南紀へ御轉進後の御苦闘に聖戰の大部分の日子を費やされたが、紀元元年の前年の秋頃から作戦進捗目醒ましく遂に輝く聖戰の完遂となつたのである。

この建國聖戰に現はれたる長期戦の過程は古今東西何れの長期戦をみても皆同軌である。これを思ふと我々は戦争は長引けば長引く程益々必勝の信念を堅め、如何なる艱苦にも撓まず長期戦は根氣比べて根氣の強い者は勝つといふことを明らかに意識してをらねばならぬ。

最後に申して置くことは建國の聖戰においては 皇宗は常に天佑を保全し給うたといふ史實である。史實は周知の通りである故省略するがこの天佑は爾來一貫常に我が歴史上の聖戰に現はれてゐる。畏くも宣戰の御詔書にも亦天佑に關する 聖旨を拜するのである。我々は堅く天佑我にあることを信念して大詔の

聖旨に副ひ奉らねばならぬ。

x x x

以上甚だ簡單ではあるが、長期建設指導の眞髓と申すべき戦争哲理は、建國の聖戰に始源し、然もこの眞髓的戦争哲理は皇戰の特質であり、外國の戰史においてみるべからざる所も渺なしとしない。我々はこれを大なる矜持とせねばならぬ。興亜の聖業それは、亜細亞の再建で、即ち亜細亞民族の國家再建の綜合である。これに關する哲理はわが建國聖戰史に存するものを以て最良と信ずる。讀者各位はこの一稿を索引として更に深く且つ廣く建國の聖戰史を研究せられて大東亞建設の眞理をここに求め、温故知新以て聖業完遂に密與せられたいと念願する。

第二 日本戰史よりみたる大東亞戰局概観

わが日本戰史の史觀に立つて現下の大東亞戰局をみるならば、必勝無礙の信念は益々堅まると共に我等の先人が我等に遺して呉れた教訓に従ひ、この大戦を必ず完遂せねばならぬといふ決意も愈々不拔となるであらうと思ふ。

わが日本戰史をみれば前記建國の聖戰を初め外國の戰史にみることの出来ない貴いものが多々あるが、ここには戰局をみるための心構へとなるべき顯著にしてかつ常識的なる若干例を述ぶるに止めることとする。

一 日露戦争と大東亞戦争との比較概観

日露戦争は皇國の運命を賭しての戦争であつた。そしてあの赫々たる戦勝の榮冠を獲て今日の大を成す基となつたことは今ここに申す迄もない所であるが、一體、當時彼我の國力や戦力はどんなものであつただらうか、その梗概を回顧して現大戰と比較することは意義の頗ぶる深いものがある。

第一に國土を比較すれば、日本は朝鮮も樺太もなき東海の一小島國で世界の庶人には其の存在すらも知られなかつた程であつた。従つて資源もその他の經濟力も誠に貧弱である上然も資源は今日程には開發せられず、人口は當時四千餘萬を算するにすぎなかつた。これに對し露國は今日のソ聯邦と大同小異で資源は豊富人口も當時既に一億二千萬人といはれ、その強大は世界列強の恐怖の的であつた。

第二に軍需工業その他の工業力といへば、ただ陸海軍の工廠があるばかりで民間における軍需工場などはない。重工業や器械工業などはこれといふ目星しいものもなく、偶々その緒についた器械工業でも和製といへば粗悪といふ代名詞たるの觀があり、ただ僅に纖維工業その他傳統の美術工業などが、その後の大を成すの氣配を示してゐるが、まだまだ英國の紡績などに比へては頗ぶる見劣りがした。

露國の工業力は歐洲列強に比すれば見劣りして尙農業國ではあつたが、中西歐の工業の刺戟を早くから受けてゐるからその工業力も遂に日本の上に在りかつ獨佛などの工業力を利用することが出来る點において日本に比し大いに有利であつた。

第三に彼我の武力を大觀すると、當時露國の動員兵力は四百萬と推定せられたに對し日本は僅に五十萬といはれた。海軍は露國の東洋艦隊だけでも我より稍優勢でこれにその本國艦隊を加ふれば我の二倍強の

兵力を有してゐた。

人馬、兵器などを比べても日本は有形的には何一つ勝れたものはない。兵員の體格體力をみても馬の優劣を比べても臂力においては可成り劣つてゐる。殊に馬の如きは我國の馬は今日の如く改良せられず、古い繪にみる猛獸然たる徵發馬で嚙んだり蹴つたりすることは中々やるが輓曳力などは甚だ弱い。兵器をみると、露國は既に機關銃を有し開戦初頭の兩山の戦闘にこれが出現したが、そのカタカタといふ發射音を聞き我が兵の驚るのをみて不可解であつたといふやうな史話を貽してゐる。勿論我には機關銃などはない。小銃は精度や機能においては伯仲の間立つたが、その口径を比較すると彼は七耗半、我は六耗半であり、彈丸の中徑が一耗大きい。即ち小銃彈は彼の方は大きい。従つて命中すれば殺傷効果は彼の方は大きい。わが小銃彈は小さいので自傷しても傷は癒え易いので露軍では日本の小銃彈を恩惠彈などと冷笑してゐたといふことである。大砲を比較すればその最大射程は彼は八千五百米、我は六千五百米、その機能を見ると彼は速射砲で當時としては先づ一番進歩したものであつた。砲身は小架に喰へられて發射と共に砲架上を後退し彈丸が飛び出れば小架は砲身を喰へて又舊に復する。砲車の車體は少しも動かない。所が日本のは速射砲の列には入つてゐるが、鞞履式といつて砲車の車輪を鐵索と熊手やうの履物で車輪の後退を喰止める仕掛けである。故にどうしても一發毎に砲車の車體は動くから次の發射は遅れる。従て同じ速射砲でも彼の方は反射速度は速いのである。砲彈を比べると、當時日本の爆藥は確に露軍のそれより優秀であり、露軍は日本の榴彈を恐れた、これが有形戦力のただ一つの我が長所であつた。併し工業力が貧弱の悲しさで、何れの會戦でも砲彈は足らず切角敵を撃退しても常にこれを潰滅に導くことをえず長蛇を逸したことは多かつた。加ふるに鋼は足らず、奉天戦の末期には銃彈を撃たねばならぬ程の悲哀であつた。

毎大會戰の兵力をみても遼陽會戰においては敵の二十二萬に對して我は十二萬、沙河會戰においては敵の二十二萬に對して我は十一萬奉天會戰においては敵の三十七萬に對して我は二十五萬弱であつた。

戰爭全期を通観すると、屢々危機に遭遇した。陸戰をみても旅順要塞總攻撃の再三の失敗、遼陽會戰のときにおけるわが第一軍に對する敵の大逆襲、沙河會戰における敵の總反攻、黑溝臺方面における敵の攻勢、奉天會戰における西正面に對する敵の逆襲など一つとしてわが方の危機足らざるものはない。戰況が行詰つてしまつたことも屢々あつた。海軍では開戦幾何ならずして主力艦二隻を失つた儘で戰を續けなければならぬ状態となつた。

かかる國力と武力を以てし而も屢々危局に當面しながら遂にあらゆる難局を克服して赫々たる戰勝をえた原因は何であるか、それはひとへに大御稜威の賜であるが、大御稜威の下では軍官民の精神力の偉大、殊に軍の訓練の優良と統帥の卓越とが主たる原因を爲してゐると確信する。

かやうに日露戰爭を回顧して現大戰をみるならば、わが國土、わが共榮團の協力とその資源、わが人口わが經濟力その他軍需工業力、及びわが武力など日露戰爭當時に比し雲泥の差があり、日露戰爭當時における露國に對するわが國力及び戦力の歩合と、現大戰における米英に對するわが國力及び戦力の歩合とを比較すれば、現大戰の方は遙かにわれは有利強力であることは何人もの常識であらう。一誠以て各戰域に最高の努力を爲せば必勝無礙たるものが斷言出来る。ただ、油斷、驕慢、悲觀、樂觀と私心の如き悪心はこれを一掃せねばならぬことはいふ迄もない。

以上日露戰爭のことを思へばわれ等は先人に對して聊かも遜色なきやう聖職を完遂せねばならぬといふ決意が愈々固く、努力せば必勝疑ひなしといふ信念も益々堅まると思ふのである。

二 我が古戦史が與ふる示唆の若干

更に日本古戦史に立つて現大戰を展覧するところにもわれ等の先人がわれ等に色々の示唆を與へて呉れるやうにみ受ける點が甚だ多いが左にその若干例を申述べよう。

元寇史をみて元が何故に第三回の日本侵攻を斷念したかを考ふると、ここには色々の理由もあるやうであるが、日本軍の勇猛なことと、神風による大軍の殲滅とに怖氣がついた點が重因として數へることが出来る。これから類推すると、現大戰における敵の反攻も所在に擊滅すると尙弘安の役の如くであらねばならぬ。天佑神護必ずわれに在りと信仰し航空戦力の増強を圖れば必ず弘安役に等しい大撃滅を爲すことをえ、敵の戰意を著しく破碎してその反攻を斷念せしむるに至るならんといふ史觀は浮ぶであらう。

次にわが古戦史を通じて著目するを要することは火力と自兵力との關係、精神主義と物質主義との關係を以て衆を破りうるの限度など難き教訓が多々ある點である。織田信長は火力主義裝備を以て武田の精銳に再起不能の大打撃を與へ長州の奇兵隊も亦火力を以て幕軍をして長州征伐を斷念せしむるの因を爲した。長藩は四國聯合艦隊を砲撃して失敗したのは砲と銃とが劣等であつた爲であつた。これ等は火力と自兵力との關係如何を物語ると共に精神力と物質力との關係をも適切に示唆するものである。如何なる大名將と雖も衆を以て衆を破るには限度があることは大楠公の濠川の戰が雄辯に立證する。

兵器や器材は何處迄も當代の科學の粹を盡すは勿論その數においても優らねばならぬ。今日の航空戰をみると飛行機さへ尙多量にあらばと考へないものはない。戦力は何處迄も精神力中心の物心一如に増強せねばならず質と量とも一方に偏すべからずである。

次に豊太閤の戦史を通観すると、その統帥には他の英傑のそれにみることの出来ない特長が多々あるがその特長の一つとして太閤は常に敵に幾倍もする大兵力を以て敵に臨み、その軍容の偉大を以て敵を脅しつけ、その怖氣ついた所をみるやこれにのしかかつて撃破することを考へる。戦意旺盛なる敵に對しては思想謀略を以てその戦意を剥ぎ、攻城戦などにおいては防者が強いとこれを力攻せず、糧道や水道を斷ち切つて飢餓に陥れるとか水攻を爲すなど兵力を損せずしてこれを攻陥することを考へるといふ點が顯著である。太閤は寡兵を鐵丸的に結集して大敵に突入寡を以て衆を破るといふような他の名將にみる如き戦は一度もしたことはない。それは何故だらう、色々の理由もあらうが、太閤には閑歷や家柄上生死を共にする普代の臣がない。物質重賞主義を公一流の度胸とて御してゆくのであるから、無理な苦しい戦をする部下は直に離散してしまひ、天下統一の企圖も水泡に歸するので、かかる特長ある統帥に出たがこれが案外戦國統一上當つたといふ結果となつた。思ふに秀吉は天下統一といふ最高目標を第一義としその手段としては武力交戦萬能とは考へなかつたやうにみえる。

敵帥ルーズベルトはわが秀吉などに比すべき人物ではないが、彼のなす所をみると猿が人間の眞似をし古狸が大坊主に化けると同様、秀吉の眞似をしやがると思ふやうな點もある。このことは前記秀吉の統帥の特長をみれば讀めるであらう。ル奴が優勢なる空軍を以てニューブリテンやニューギニアにおける皇軍の補給線を遮斷して皇軍が弱り果てた後攻め立てようとか、大軍然も近代化學の粹を盡した裝備でわが小島の守備へ攻め寄せるとかといふことや、物質萬能、物量主義で作戰するなどは全く秀吉の眞似である。

唯、多くの損害を省みず執拗にやつて來る所は猿の眞似、狸の化的な所があるからだと評することが出来る。秀吉の戦史を研究すると『乃公死後乃公の眞似をする輩が出て來るから用心せよ』と教へてゐるやうにみへる。

秀吉流の作戰に對する對策如何をわが古戦史についてみるならばそれは馬野山における吉川元春の遣り方、小牧長久手戦における徳川家康の遣り口である。これを詳述する紙數がないのは遺憾であるが、要するに元春は度胸を以て秀吉を呑んでしまつた。元春は背水の陣を秀吉の大軍の瞰制下に布いた。若し秀吉が山を下つて來攻するならば、元春は麾下の七千人を鐵丸的に團結して秀吉の旗下めがけて突進無二無三に斬立て秀吉の首を擧げようといふ企圖であつた。その時の兵力は秀吉は四萬五千、元春は七千であつた所で秀吉は元春の陣容を眺めその大膽不敵の決意を看破し忿兵とは戦を交へずと稱し陣を撤して姫路に歸つてしまつた。家康が小牧長久手戦において秀吉の派遣したる三河擄亂の企圖を有する池田勝入齋等の指揮する二萬餘の別働隊を長久手において撃破したのは丁度鳥捕りの上手な犬が、その附近で遊んでゐる雞を物蔭から狙つてゐる隙をみて噛み殺すといふのと同じ要領で神迅機敏に敵の虚に乗るのである。

元春も家康も『秀吉流の敵をやつつけるには乃公のやうに考へてやれ』と教へてくれてゐるやうな氣持がする。

これを現戦局にみても山崎部隊がアツツにおいて敵の度胸を抜いたことはキスカの撤退を容易にし、開戦初頭から行はれた屢次の奇襲に常に功を奏してゐることを思へば筆者の戦史觀は決して牽強附會ではあ

るまいといふことが分ると思ふのである。

織田信長の戦史中にも亦物心一如の戦力構成のことを初め今日示唆に富むものが多々あるがその中でも美濃の攻略戦史について大いに考へさせられる一事がある。信長はまづ今川義元を桶狭間に奇襲してその首を擧げ、ついで徳川家康と同盟して永祿四年から美濃攻略に着手した。そして爾來、執拗に美濃に進攻したが、その都度美濃の齋藤氏から撃退せられた。そこで最後に秀吉を用ひて墨股に前進根據地として築城せしめた。秀吉の才幹はよくこれを爲し遂げた。よつて信長はこれを根據地として一方謀略を以て美濃齋藤氏の家中を切崩し他方又武力を以てする侵略を行ひ、永祿十年夏を以て遂に齋藤氏を亡ぼしてしまつた。永祿四年第一回的美濃進攻から算して七年目、その進攻回数は大體八回でその大部は失敗に終つたが最後に成功したといふ譯である。これは徹底せる執拗なる攻勢は最後の勝利であること、防勢に立つものは屢々敵を撃退しても最後にはやられることを示唆するものである。不準備なる猪突攻勢は必ずしも成功しないが、準備したる實力ある執拗なる攻勢は必ず奏効する。防者は敵の攻撃を撃退せば必ずこれに乗じて攻勢に轉ずる必要がある。齋藤氏の如く幾回となく敵を撃退し乍ら攻勢に轉ずることをしないで遂に致されて敗亡してしまふものである。

この戦史を思ふと我等は敵の反攻を撃滅した後は直に攻勢に轉ずるの用意と企圖とが必須なることを了解せねばならぬ。

更に戦國戦史において示唆に富むものはわが戦國時代の名將は多くは四周に敵を受けながら大成した人

である點である。即ちこれ等の名將は常に内線に在つてよく巧妙に作戦したことである。學者は往々外線作戦の利を説き或は現下敵の態勢は、印度からビルマへ、北部濠洲からチモール方面へ、西部濠洲から、ニューギニヤやビスマーク諸島へ、ハワイ方面からギルバートを經てわが内南洋へ、アリューシャン方面からわが北邊へと押寄せて來る氣配が濃厚であるのを見て敵は外線作戦の利を占めてゐるようにいふ人もあるが、我等の祖先には幾多内線作戦の名將あることを考へその内線作戦成功の因を温ねて新を知ることが緊要である。

最後に同盟、聯合につき著目すべきことは信長と家康との同盟の鞏固なりし原因である。これは兩雄共に互にその偉大さを知つて信頼し合つたこととその同盟と誼とを重んじたからである。東西古今の同盟や連合の史實をみると、非常に薄弱なるものが多い。ただ當局の利害の打算から握手したり放れたりするのが多い。これが今日でも伊國の脱落に如實に現れた事象である。だが、日獨同盟は織徳同盟の如くであらねばならぬ。日本は獨逸を、獨逸は日本を信頼し合ふことにより同盟が固くなるのである。信頼といふことは單なる依頼心ではない。これを誤解してはならぬことはいふ迄もない。

織徳同盟はわが戦國統一の一大原動力とみて宜しからう。日獨同盟は戦國世界を統一する起動力たることを期し兩國は國民的の握手を益々堅くすることなほ、織徳同盟の如くすることである。

第三 歐洲戰史よりみたる獨逸の戦局概観

獨逸の戦線縮小をみていかに悲觀視する向もあるが、苟くも戦史を研究しこれを現戦局と對比すれば悲觀人氣などは起りえない。併しこれを詳述する頁數はない爲め、ほんの一端かつその梗概に止めざるをえないのは遺憾である。ただ、讀者の戦局正觀の一助とならば幸甚である。

一 露國進入戦史と獨軍の作戦

「廣大なる國土の完全なる攻略は不可能である。露國に深入りした者は必ず負ける」といつたクラウゼウキッツの言は今日獨軍の將星で知らぬ人はあるまい。況んや熟慮斷行のヒ總統もやである。このことを思へば獨逸の對ソ作戦は斷じて過去のカール十二世や奈翁一世の露國侵入の失敗と比すべきではない。カール十二世も奈翁一世も露國侵入の失敗は爾後の破滅の基となつた。クラウゼウキッツはかかる戦史をみてかくいつたのであらう。けれども今日の獨軍は東方戦線の縮小により却て全態勢を強化することが出来た思ふに獨逸の作戦は開戦第一年においてはソ軍に大打撃を與へ、あはよくばこれを潰滅に導かうとしたのであらうが大打撃を與へたことは確實だ、第二年は、ソ軍に引續き大打撃を與ふることは勿論だがその目指す所は南ソにおける軍需産業力を破壊してソ軍の戦力を弱めようとしたにあつたことは疑ふ餘地はない。

い。この觀點からすれば獨軍はその目的の大部を達した、ただソ聯の油田地帯を破壊しえなかつた點は遺憾であつたであらう。若し假りに獨軍が南ソの經濟力破壊を完全に行つたとすれば爾後どうしただらう。何時迄もあの大軍で遠くソ領内に深入りした儘、作戦するだらうか、兵站線は伸びる補給はむづかしくなる。南部戦線(北阿戦線)のことや敵の第二戦線のことを考ふれば、ここに何人もクラウゼウキッツの言を思ひ出さぬものはあるまい。獨逸軍は自發的に後退して更に次の作戦を準備したであらう。所がただ不幸にして將にス市を攻略し終はらんとする矢先、ソ聯軍の反撃に會し羅伊兩軍が破れた爲、その撤退を早むるの餘儀なきに至りたるのみならずその第六軍を犠牲とするの止むなき状態となつたが、これがためロスフ、ハリコフ方面への撤退は大なる損害を受けず整々と出来、又その後ドニエブル河の線に向ふ退却はいはゆる出血戦術でソ軍に損害を與へ乍ら撤退した。獨軍の發表したソ軍の損害は莫大なるものがありこれに比すれば獨逸軍の損害は甚だ少ないやうである。ソ聯は失地回復といふ名を立てたがその戦力の消耗は甚だしいものがある。獨軍は一旦攻略した敵地を失つたが敵をしてその戦力を消耗させた量は甚だ大なるものがある。その何れが戦争指導上有利であらうか、ソ聯は攻略的にはよい結果を収め戦略的には損をした。獨軍はこれと反對であるから未だ以てその是非優劣は判断が出来ぬが、數において優る敵を對手とする獨軍としては敵の戦力を消耗さすといふ方策に出た方は宜しい。廣大なるソ聯を攻略するよりもその莫大なる兵力を消耗さすことはクラウゼウキッツの言に省みるゆゑあんなのである。獨軍は斷じてカール十二世や奈翁一世の轍は踏んでゐないことが分る。奈翁一世やカール十二世の退却は夜逃的敗退であるが、獨

軍の退却は一仕事を終つた後の悠々たる引上げといふべきである。

二 前大戦にみる獨軍の作戰振りと現大戦の作戰振り

獨軍は由來果敢なる攻勢主義であり、その攻撃力の素晴らしいことは世界的に有名である。第一次歐洲大戦においては徹頭徹尾攻勢を取つたといふも過言ではない。そしてその戦果も亦偉大ではあつたが、これがため消耗した兵力も夥しいものがあつた。然もその最後の攻勢たる千九百十八年の春季及び夏期の攻勢の行詰りに乗せられて遂に脆くも敗退し全面的降伏へと轉落してしまつた。滿四年間四周の陣壁を打破すべくあちらこちらをぶち破はしはしたがしまひに力盡きてへたばつたといふ結果となつた。今次の大戦においては獨軍はこの點については非常に考へ直してゐるやうにみえる。攻防進退その直しきを制し殊に兵力を愛惜しその消耗を避くるの用意がよくみえる。前大戦の作戰は何れかといへば弾力性なき攻勢の一本調子の體があるが、現大戦においては攻防進退その宜しきをえその途に適ふ弾力性に富む作戰であるといふ點において頗もしく力強く感ずる。金城湯池的なる西歐沿岸の防備、伊太利戦線の防禦、東部戦線の縮小など全く弾力性あるものの伸びんがための縮小であるとみるのが正しいみ方であらう。

これからみると、ソ聯軍の進二無二の攻撃は千九百十八年の獨軍の最後の攻勢に對峙するものがあり、逆に獨軍は當時の聯合軍總司令官フオッシュの攻勢移轉と同じ戰機と戰果とを狙つてゐるやうにもみえる。

三 七年戦争よりみたる今次の大戦

七年戦争は現在獨逸國の中核ともいふべき普國が埃露佛の列強と小隣邦とを敵として惡戰苦闘、最後の戦勝者たるの榮譽をえ中歐の強國に列するに至つた戦争である。そしてその當時の普國王は有名なフリードリヒ大王であつた。

この戦争は恰も獨逸戦線の如く奇襲に初まつてその後大王はロイテンとかロスバツハにおいては後世に輝く名作戦を行ひ敵を撃破した。併しその後次第に戰勢は悲運となり、オルミュツツやホキルヒの失敗あり遂にはクンネルスドルフの大敗となり大王は正に苦境のどん底へ入りかけた。大王は毒藥を懷にし死すとも屈辱條約は結ばぬとの意氣を以て頑張つたが埃露佛の聯合軍は次第にその提機が緩み露國は死す普國と和し次いで佛は聯合より退き、埃國も獨りではどうにもならぬ破目となりここに普國は勝利の榮譽を受けることとなつた。

七年戦争時代の意氣は今日獨逸國民はこれを有し、フリードリヒ大王とヒットラ總統とを比ぶれば總統はその人物技倆及び信望において優るとも劣ることはない。米英ソは七年戦争當時の埃露佛とまでゆかなくともその利害關係は根底において一致せず唯目光の利害で互に利用せんことを考へてゐる點において似てゐる。獨逸が頑張り抜くこと尙フリードリヒ大王に率ゐられた普國民のやうであれば、米英ソの足並の亂れる日は必ず來ると考へられる。この頑張りのためにも第一次大戦のやうに弾力性なき作戰をなさざ

る用意がありありとみえるやうな気がして心強く感ずる次第である。

尙特に附言して置くことはフリードリヒ大王は七年戦争中その苦境に立つたときでも常に兵力を愛惜してその消耗を選じた點はヒ總統の戦争指導の主義と相通するものがあるといふ點である。

四 第一次世界大戦と今次大戦との比較概観

第一次世界大戦における獨逸をみると前述の如く攻勢一本調子で遂に敗れた感じもするが、現在の獨逸國だけで全世界を對手とし最後の一戦に敗るる迄滿四年武力戦においては局部的には連勝であつた獨逸の敢闘は禮讓に値する。これと比ぶると今日獨逸の歐洲における勢力範圍はノルウェー、オランダ、ベルギー、フランス、中北部イタリア、バルカン全部、ポーランドに互つてゐる。この中に含む戦争資源は米英ソを敵とするに不足はない。この勢力範圍だけ比較しても獨逸の力は第一次大戦に比し遙かに大なるものがある。更に獨逸の爲最大の強味は東に日本を盟邦とし日本が米英の力の少なくも半分を引受ける。然もこの日本が第一次大戦のときなどと比較にならぬ大きい力を持つてゐるのであるから、第一次大戦に比しては必勝を疑ふの餘地はないといふべきである。加ふるに日ソは依然として友好關係を有し國際信義を守つてゐることは斷じて獨逸に不利ではなく寧ろ米英に痛いことを知らねばならぬ。

このやうな極めて簡明明白な常識觀を忘れて下らぬ枝葉末節の事柄のみを研究してゐるから正鵠を失し

てしまふのである。筆者は右述の戦史觀に副ふよう獨逸が作戦することを信じて疑はぬ。第一次大戦當時に比し米英ソも力を増してゐるが、日獨の増方と、米英ソとの増方を比較すればこれ亦常識的に我等の有利を確信することが出来るのである。若しそれ獨國民の旺盛なる志氣や不足なき資源などを考ふると獨逸の悲運など考ふる餘地はないと思ふ。

第四 戦史に現はれる米英戦略の特質概観

敵米英は、彼等の誇りとして古來戰場では敗けることがあるが、戦争には敗れたことはないと言言してゐる。生意氣とは思ふが彼等の戦争史をみると初め悪し後善しといふ戦争過程を辿つてゐることは事實だ、けれども今度こそは彼等の誇りの鼻をへし折り、初惡後善の戦争史に終止符を打ち初惡後惡とせねばならぬ。又これをなすべき確信を持つものである。

それはそれとして、一體何故に彼は過去において初惡後善の戦史を胎したのであらうか、このことを考察してみる必要がある。

思ふに彼等の國家體制と國民性とは迅速機敏なる開戦を爲し、奇襲を行ふなどといふことが出来ない。故に初期においては常に立運れるが次第にその力を回復して戦勢を盛返へして來るのである。何故にかうなるかといふと、彼等は第一に富力が大であり戦力の再建の力は充分ある。國民性は強靱であるから緒戦の失敗後持久力は強い。謀略は特に上手であるから武力戦の缺を各種の文力を以てする謀略によりこれを

補ふ、就中、他國に金力をばら蒔いて自己陣營に引入れ他國の犠牲において持久力を高める。かういふことをしてゐる間に自國の戦力は次第に充實して来る。その頃になると對手にも缺陷が生じて来る。そこにだんだんと附け込み彼等に有利に導き次第に盛り返へして最後の勝利をうるのである。これが過去の彼等の戦争史であるからこれから彼等の戦略を判断すると、歸する所は莫大なる物的戦力と巧妙なる思想謀略の結合といふことになると思ふ。彼等の目指す所はあらゆる力を對手の戦意破砕に一元集中するに在り、このことについては妙をえてゐる。單一なる作戦眼を以てみるとつまり馬鹿氣たことをするやうにみるが彼等は彼我の戦意に及ぼす影響を考へてゐるのである。

そこで現在彼等の遺口をみると、奪取し易い所に向ひ優勢なる兵力と近代科學の粹を盡した裝備とを以て物の量と質とでわれを脅しつけ、わが國民の戦意を破砕することを考へると共に一方思想謀略によりこれを助成しようと思へてゐる。だから筆者は前にルーズヴェルトは秀吉の眞似をしてゐる狸の化けものといったのである。彼等のこの手は昔から一貫して今日も大差はない。伊國を脱落させようと思つてバドリオに對して打つた手は、謀略一點張りて空襲も謀略の爲、地上、海上の戦闘も伊太利をおどかすことを目的としてゐる。これと共に言論と金力とで思想を直接攪亂するといふことに歸着する。第一次歐洲戦争においては、この外に獨逸を封鎖して飢饉に陥れて參らせてしまつたが、今次の戦争でもこの手を考へてゐる。局部的には洋上の島々に對し大勢においては日本と南方を遮斷して補給を絶たうとしてゐる。打つ手

は古今一貫してゐる。たゞ多少變形して来るが主旨と筋骨とは一つである。我々は彼の手を看破して斷じて致されてはならぬ。

昭和十九年二月五日印刷
昭和十九年二月十日發行
(二月二十五日發行)

「戰史からみた戦局観」

定價 十五錢
送料 四錢

編輯・發行人 大地山郁太郎

印刷所 東京都芝區田村町四丁目二番地
株式會社 青野印刷所

(東京一〇三)

翼贊壯年叢書
第39卷

不
許
製
複

發行人 東京都墨田區龜ヶ岡一丁目一番地
大日本翼贊壯年團本部

電話東京一九〇〇〇番

製本控

917 函

書名

翼贊壯年叢書

294 號

19 年

3 月

號

著者

大日本翼贊壯年團本部 編

備考

19 年 3 月

1 日 寄贈

冊

同第



393.2
N 34
3



15 ㇼん

